

## 16, 17 世紀の悪魔学における人狼

菊地英里香

### はじめに

クレベールの『動物シンボル辞典』<sup>1</sup>によれば、狼という肉食獣は、他の動物と同じように、ふたつの役割をもっている。狼は、夜、目が見えるため、光を表す。狼は、犬に先立って動物誌に登場したが、野性の犬とみなされ、有益な仲介を望むこともできるが、最悪の災難をもたらす恐れもあり、恐ろしい聖霊のように人間集団のまわりを徘徊する。最悪の災難とは、家畜や人間の殺害であろう。人狼たちとされた人間たちは、狼に変身して、家畜や人を襲うと考えられていた。彼らに付与されたのは、当然、狼のもつ負の側面である残忍性である。

魔女同様、伝説や民話の中で息づいていた人狼は「魔女狩り」の時代において、悪魔と結びつけられることとなる。人狼への変身に悪魔が加担していると考えられたため、人狼は多くの悪魔学の書物の中で取り上げられるテーマのひとつとなっていく。本稿では、まず中世における変身の解釈について、特にアウグスティヌスの見解を丁寧にたどりながら概観する。次に、中世の伝統をうけて近世の悪魔学者たちが人狼をどのようにとらえていたのか、特色のある3人の悪魔学者（ヴァイアー、ボダン、ボゲ）の主張を分析する。最後に、人狼と面会した悪魔学者ランクルの率直な語りに耳を傾け、悪魔学者たちにとって人狼とはどのようなものであり、なぜ彼らの興味が引きつけられることとなったのか考えてみたい。

### 1. 中世における変身の解釈

中世においては、古代ギリシア・ローマの動物への変身にかかわる物語が引き継がれていた。変身を扱った文学作品は、変身を悪魔により引き起こされた幻覚とみなす護教文学と変身を現実のものとして疑わない世俗文学のどちらかに分類されるが<sup>2</sup>、ここでは前者についてのみ取り上げる。

#### 1.1 アウグスティヌス

アウグスティヌスは『神の国』第18巻において変身について語っている。この部分

は後で見るように、後世の悪魔学者たちに多大な影響を及ぼすこととなる。オデュッセウスの仲間を獣に変えたキルケ、アルカディア人たちの狼への変身と彼らの神リュカイオスへの供犠について触れた後、今日でもこのようなたぐいの話を見聞きしたと主張する者たちがいるとアウグスティヌスは述べる。

じっさい、わたしたちがイタリアにいたときにも、その国のある地方からそのような話を聞いたことがある。その地方では、悪しき術に通じている宿の女主人たちが、自分たちが望んだりあるいは可能な場合に、よく旅人にチーズを与えたが、そうするとたちどころに旅人は駄獣に変わり、必要なものを何でも運び、その仕事がすむと再びもとにもどったそうである<sup>3</sup>。

動物への変身を現実のものと考えすることは、当然キリスト教の立場からすれば許されざるものであった。なぜなら、被造物の実体に変化をもたらすことができるのは全知全能の神のみであると考えられていたからである。そこで、アウグスティヌスは動物への変身についてひとつの解釈を示した。すなわち、変身は身体も魂も伴わない、悪魔によりもたらされた幻覚にすぎないというものである。

ダイモンは、いま問題になっているようなわざを何かするにしても、もちろん実在を創造することはできず、真なる神によって造られたものを、見かけに関してだけ、じっさいとは違ったものに見えるように変えるだけである。そういうわけで、〔人間の〕心についてはもちろんのこと、身体さえも、ダイモンのたくらみや力によってじっさいに動物の四肢や相貌に変えられうるなどとけっして信ずべきではない。むしろ、人間の幻<phantasticum>——それは思考や夢の中で無数の種類のものによって変わり、そして、物体ではないが、驚くほどの速さで物体に似たかたちをとらえる——が、人間の身体的感覚が眠っていたり衰えているときに、他人の感覚に何か言い表し難い仕方  
方で物体の姿となってもたらされるのだと信ずべきである<sup>4</sup>。

ここで注目しておきたいのが **phantasticum** という言葉である。これは幻のようなものであり、悪霊の作用がここに反映される。人間は実際には他の動物に変身することなどできないのであるが、就寝中や虚脱状態にあるときに自らが変身している幻を見ることは可能である。眠っている者は、夢想の世界にいるわけであるが、同時に現実の世界にも属している。なぜなら、この現象は眠って見る夢に起こるのと同様に、起

きている状態に対しての幻としても現れるという。つまり、夢を見ている者がしっかり起きている者たちによって、他の者と同じように認識されるのである。すなわち、この幻は夢を見ている者が自ら夢の中で見たイメージであると同時に、夢を見た本人から独立し離れて存在するものでもある。そして、この幻は見た者とそれを受け取る者の感覚の中にしか存在しない。悪霊たちは夢を見ている者の想像力に働きかけ、何らかの形をこの幻に刻みつける。これが他人の知覚にも伝わる。悪霊たちは幻を念入りに作りあげ、この見せかけに現実性をもたせるために細部にまで気を配る。例えば、馬に変身して荷物を運んだという幻をもっともらしくするために、悪魔は実際に荷物を運んでおくのである。

神の力による変身以外は悪魔のまやかしによるものだとするアウグスティヌスの見解は、中世を通じて変身に関する定説となっていった。9世紀のものと考えられる「司教法令」(Canon episcopi 26, q. 5)は、魔女たちが行くと考えられていた夜間飛行とともに、魔女たちが動物に変身することも否定している。そこでは、万物の創造主である神の以外の介入によって被造物がよりよくあるいはより悪しくにしても、変化させられたり、他の見かけや姿に変えられたりすると考える者たちは無信仰な者とされている<sup>5</sup>。

## 1.2 トマス・アクィナス、『魔女たちへの鉄鎚』

トマス・アクィナスもまた、人間の動物への変身は起こらないと『神学大全』第3部第114問題第4項において断言している。トマスはアウグスティヌスの『三位一体論』(III-8)に依拠し、悪霊たちが自らの力によって質量のある形相から別の形相へ変えることはできないが、世界の諸元素のうちに見いだされる若干の種を利用してそのような成果をもたらすことができるとする。何らかの自然的な力によって可能な変化は、このような種が利用されることにより、悪霊たちの働きをつうじて行われるとされる。蛇や蛙が腐敗すると蛆虫などが生まれるといった変化がこれにあたる。自然の力によらない変化が、悪霊たちの働きによって行われるように見える場合があっても、これはただの見かけ上のものに過ぎないとトマスは言う。

そして、そのような見せかけには2通りの働きかけが用いられているとされる。ひとつは内部からであり、悪霊は人間の表象力のみならず身体的感覚にも働きかけ、ものが実際にあるのとは別なように見えるようにすることができる。もうひとつは外部からであり、悪霊は任意の形相や形象をそなえた物体を空気から形作り、これをまとめて自らがそのものであるかのように見せることができる。また、あるものに任意の

ものの物的形相をまとわせてそれがまさに本物であるかのように見えるようにすることもできるとトマスは考えた。

シュプレンガーらの手による『魔女たちへの鉄鎚』(1486年)<sup>6</sup>は魔女狩りを推進するために著された書物であり、魔女たちの行うとされていた諸悪行についても詳しい。魔女たちの変身がありうるかどうかについても著者たちは検討を加えているが、基本的にはアウグスティヌス以来の伝統にのっとりた解答を出している。異端審問官たちは悪魔が強大な力をもっていると考えていたが、悪魔が行うと考えられていたことがらすべてを可能と考えていたわけではなく、神学的、哲学的な知識に基づいて可能か不可能かを判断したうえで理論化している。

変身に関しては、まず第1部第10問題「魔女たちは呪いよって人間を動物の形に変身させることができるか」で論じられている。ここでの答えは、悪霊はある人間が本物の動物に見えるほどまでに、人間たちの想像力をだますことができるというものである。また、第2部の第1問題の第8章「魔女たちはどのように人間たちに動物の形をあたえるのか」において、変化にはふたつあると考えられている。ひとつは本質的変化であり、見られているものの自然的形相による。これは神だけがもたらすことができるものであり、「司教法令」で言われている変身はこちらのことであるとされる。もうひとつは非本質的な変化であり、見ている者の感覚にのみ存在する。神の許しの下で悪霊はこの非本質的な変化を行うことができるとされた。例えば、悪霊は病気によって何らかの非本質的形相を生み出すことができるため、ある者の顔がレプラか何かに侵されたように見えるといった現象が引き起こされるのである<sup>7</sup>。

そして、「司教法令」はこの非本質的な変化について正確に述べてはいないが、このような妖術による変身を除外しているわけではないと推定されている。なぜなら、権威と理性と経験によって、その存在は証明されているからだ。『鉄鎚』の著者たちは主張し、『神の国』の事例に次のような説明を加える。まず、オデュッセウスの仲間たちの豚への変身は見せかけだけのもので、視覚があざむかれている。動物の形がイメージの記憶の中から引き出され想像上の幻がもたらされることにより、他の感覚や器官に強い影響が与えられるため、当人は自分が動物を見ていると思ひこむのである。先述の旅人にチーズを与えて駄獣に変身させていた女主人とプラエスタンティウスの父(夢の中で馬になって穀物を運んだ)の話に関しては、3つのまやかしがあるとす。まず、これらの人々は妖術によって動物に変えられたように見せられた。つぎに、実際には悪霊たちが荷物を運んだ。さいごに、他の人々にも彼らが動物に変身したように見えた者たちは、彼ら自身も動物に変身したように思ひこまれた。これは、7年

間変身し、牛のように草を食べていたネブカドネツアル王に起こったことと同じである。鳥に変えられて神殿の周りを飛び回るディオメデスの仲間たちは、悪霊たちの仕業によって見ている者たちにもたらされた想像上の幻と考えられなくもないが、むしろそれらは空気の成分でできた見せかけの体をまとった悪霊か、あるいは代用として悪霊が用意した自然の鳥たちであるとされた。

人間の狼への変身も『鉄鎚』においては、悪霊によるまやかしであるとされている。パリのギョーム<sup>8</sup>の伝えた話であるとして、次のような事例が挙げられている。ある男は自分が狼に変身すると考えており、ある特定の時間に洞穴に隠れに行っていた。そのあいだそこにいたにもかかわらず、彼は自分がさまよい子供たちを貪り食う狼になっていたと信じていた。だが、実際にはこれは狼に移った悪霊がしたことであり、男は眠っているときに誤って自分がしたと思いこんだのである。彼は長いあいだ正気を失っており、ある日狂乱して横たわっている状態で発見された。男たちと老女たちが獣に変身すると信じていた異教徒たちの過ちを拡散するために悪霊はこの種のことを好むのであるが、当然、悪霊のこのような仕業も神の許しの下で起こるとシュプレンガーらは言う<sup>9</sup>。

このように、キリスト教の伝統においては、人間の動物への変身が実際に起こるとは考えられていなかった。異教文学や民間信仰において語られていた変身を、神学者たちは悪霊によるまやかしにすぎないと断言していた。被造物の本質を変化させることができるのは神の特権であり、それを悪霊に認めることは神への冒瀆に他ならなかったからである。

## 2. ヴァイアー、ボダン、ボゲの人狼解釈

### 2.1 ヨハン・ヴァイアー『悪魔の幻惑』（1563年）

狼憑き（lycanthropy あるいは mania lupia）は古代から知られ、研究しつくされた症例であり、16、17世紀の悪魔学者たちはこの精神病の存在をみな認めていた<sup>10</sup>。ヨハン・ヴァイアー（1515－1588年）は『悪魔の幻惑』<sup>11</sup>第4篇第23章「狼化と呼ばれる病気について」で狼化が精神病に他ならないとする見解を示している。

ヴァイアーによれば、ブラバンのギョーム<sup>12</sup>が『歴史』の中で伝えている男は、悪魔のまやかしによって自分が飢えに狂った狼に変身したと思いこんで森の中や洞窟をさまよい、特に少年たちを攻撃したに過ぎない。また、1541年にパドゥアで自分が狼だと考え、多くの人々を野原で襲って殺した男がいたが、この男も同様である。やっ

のことで捕えられた彼は、自分が本物の狼であると自信たっぷりに言い、唯一の違いは自分の皮膚が裏返しになっていることだと述べた。つまり、毛皮が内側になっているということである。それゆえ幾人かの人々が彼の腕と足を剣で切ってみたところ、真相を知った。つまり毛皮などなかったため、人々はこの男が無実だと認め外科医のもとに送ったが、男は数日後に息絶えた。

これらの人狼たちがメランコリア（黒胆汁）に苦しめられていることに間違いないとヴァイアーは言う。彼らは黒胆汁に侵されることで自らが狼や犬に変身したのだと思ひこみ、特に夜間に家を出て狼や犬の行動をまねする。彼らの顔色は青白く、目は落ちくぼみ乾燥している。薄暗くとも目は見え、舌は乾燥して喉はたいそう乾き、その一方で口にはよだれがあふれている。足は頻繁に被るけがや犬にかみつかることにより、常に痛みに見舞われ癒えることはない。これらの病人たちは瀉血（意識を失うほどまでの）を受け、十分な栄養と新鮮な水を使った沐浴、バターミルク、コロシント（ウリ科の蔓性多年草。乾燥させた果実を下剤に用いる）を用いた聖なる解毒剤などのメランコリアに有効な治療法を用いて治されるべきである。発作の前に彼らの頭を睡眠に効果のある薬剤で洗い、鼻孔にアヘンを押しつけ、しばしば催眠剤も経口であたえられるべきである<sup>13</sup>。

このように述べた後、ヴァイアーは言う。「この自然の欠陥、人間の精神の異常がアルカディアの王で罪のためにユピテルに狼に変身させられたリュカオンについてのオウィディウスの物語を引き起こしたということはありうる<sup>14</sup>。」そして、話の中で、オウィディウスは狼化として知られるメランコリアの病の特徴を列挙していると彼は指摘する。すなわち、慄いて逃げ、未開地を探し、遠吠えをし、話そうとしても無駄に終わる、といったことがらである。アヴィケンナは黒胆汁に侵された多くの人々が自らをライオンや悪霊や鳥であると想像すると述べている。ヘロドトス（『歴史』IV, 105）によれば、スキュティア民族のネウロイ人たちは自分たちが狼に変身すると確信しており、ブルガリア人の王シメオンの息子ボヤンも狼に変身していたと伝えられているが、悪霊や被造物はいかなるものも創造することもできなければ、それに真の変質をもたらすこともできないことは理性と教令によって十分明らかにされているとヴァイアーは述べる<sup>15</sup>。

ヴァイアーは同時代の人狼事件についての解釈も行っている。1521年にブザンソンで裁かれたミシェル・ヴェルダンとピエール・ビュルゴのふたりの人狼の事件についてヴァイアーは詳述しているが、彼らの語った内容の要約が以下のとおりである。

被告人はピエール・ビュルゴとミシェル・ヴェルダンであり、彼らは神を棄て悪魔

に仕えることを誓った。はじめに、悪霊は暴風雨のせいで畜牛が四散し途方に暮れていたピエールの前に現れた。悪霊は自分に忠誠を誓えば、家畜を嵐や獣によって失わない方法と富を授けてやるともちかける。ピエールは同意し、神と聖母と諸聖人を棄て、悪魔に仕えることを誓った。信経を唱えることやミサが終わるまで教会に入ることなど禁じられたため、彼は2年間ほどこれを守った。やがて、畜中の番をする必要がなくなったピエールは、悪魔を無視して再び教会に通うようになった。これはミシェルに悪魔のもとに連れていかれるまで、8年か9年くらいのあいだ続いた。

あるとき、ミシェルはピエールをシャテル・シャロンのはずれに連れていった。ここでは人々がそれぞれほの暗い青い光を放つ緑色のろうそくを持ち、ダンスをして悪魔に犠牲を捧げていた。それからふたりは軟膏を体に塗って狼に変身し、驚くべき速さで駆けた。その後、人間の姿に戻った。しばしば彼らはまた狼の姿になりメス狼と交わり、人間の女性とそうしていたときと同じ快感を得た。ピエールは6、7歳の少年を足と歯で殺した。村人たちに追い立てられなければ、これを食べるつもりだった。それから、ミシェルは庭で荷を集めていた若い娘を殺し、キュヴェの領主に追い立てられたと自白した。ふたりはさらに4人の娘を殺し、殺害の時間、場所、特に子供については年齢も言った。またある粉に関して、それで人々を殺したとも言った。

ヴァイアーは、ふたりの人狼が告白した内容は、夢の中で起きたか悪魔によるまやかしにより引き起こされたものでしかなく、昏睡状態か強硬症に苦しむ者のお話にすぎないと思う。彼らの悪魔との契約にしても、これは非常に弱く取るに足らないものだ。なぜなら、ピエールはその後も牛を見張りながら8年か9年ほど敬虔な暮らしを送っていたからだ。彼の自白は悪魔のまやかしにだまされた男のばかげた思いみに過ぎないとヴァイアーは言う。悪魔はピエールが一人でいるときを狙って、狼のイメージを呼び起こした。これらの狼の像は実際に危害をもたらすことはできない。できるとしても、それは単なる見せかけに過ぎない。あるいは、これらの狼が実物だと認めざるを得ないとしても、これらはサタンが連れてきてその後引きあげさせたもので、ピエールを狂気と間違った思いこみにより、より自分に引き寄せるためになされた。このようにヴァイアーは考えたのだった。そして、何らかの物質的な力や性質のおかげで人間が狼や他の生き物に本当に変身するとする見方には驚嘆を禁じ得ないと彼は言う。

それ<人間>は神の似像として創られ、体、魂、そして精神から形成され、神と聖霊の神殿であり、理性の宿る場所であり、知識、至高のもの、まっすぐなものを切

望する器官である。その視線は彼に何か似たもの、そして故郷として天にまっすぐに向けられている。人間とは、いわば小宇宙であり、それに神が万物、すなわち野の羊、乳牛、畜牛、空の鳥たち、海の魚たちを従属させた。神はこれらすべてを人間のためだけに創造した。この人間が理性のない動物であり、生き物を丸呑みする有害なことこの上ない狼に変身する、あるいは何らかの能力や明らかな人知を超えた特別な効果により別の被造物になると信じるなどとは！神の摂理はこれを許さない。聖なる文学もこれに抗して叫んでいる。教令の数々もその可能性を否定している。自然と理性そのものがこれを許すはずがなかろう<sup>16</sup>。

ヴァイアーによって狼化はまずメランコリーと関わる精神病としてとらえられていた。悪魔が人間の想像力に働きかけることをヴァイアーは否定しないが、すべてはまやかしにすぎないため、現実には狼化が現実には起こると彼は考えなかった。そして、その大前提には、神の似像として創造された人間が狼のような残忍な獣に変身するわけがないという強い信念があったと考えられる。

## 2.2 ジャン・ボダン『妖術師の悪魔的狂気について』（1580年）

ジャン・ボダン（1529/30－1596年）は『妖術師の悪魔的狂気』<sup>17</sup>の第2篇第6章「狼化について、悪魔は人間を獣に変えることができるか」で変身についての考察を行っている。ボダンは人間の動物への変身は信じがたいことだと認めながらも、妖術師たちに対して行われた訴訟や神や人間の物語、そしてすべての民族のもとに確かな証拠があると言う<sup>18</sup>。

人狼裁判の実例としては、1573年にドール高等法院で裁かれたジル・ガルニエの事件が挙げられている。ガルニエは聖ミカエルの祝日（9月29日）に人狼となり、セルの森の近くで10歳から12歳くらいの少女を捕えて動物の足のような手と歯を使って殺害し、太ももと腕の肉を食べ、残りを妻に持ち帰った。その一か月後にもまた人狼となり別の娘を捕まえて食べようとしたが、これは3人の人間に邪魔されて未遂に終わったとガルニエは自白した。その15日後にはグルディザンのブドウ畑で10歳の少年の首を絞めて殺し、太もも、腕、腹の肉を食べた。その後は人狼ではなく人間の姿でペルーズ村の森で12、13歳の少年を殺した。邪魔されなければ食べるつもりだったという。この自白によりガルニエは生きてまま火あぶりとなった。

このような実例に加えて、古今東西の物語や歴史がボダンに人狼の存在を確信させており、地上のすべての民族と古代の人々が同意しているというのに、狼化を信じな



い者がいるということが不思議でならないと彼は述べている<sup>19</sup>。ヘロドトスが2000年前にそれについて書いているだけではなく、その400年前にホメロスも書いており、同様にポンポニウス・メラ、ソリヌス、ストラボン、マルクス・ワッロー、ウェルギリウス、オウィディウスその他無数の者たちも言及していると述べ、ウェルギリウスに関しては、一度ならず実にしばしばこのような変身を目撃しているとボダンと言う<sup>20</sup>。

プリニウスはすべての作家が同意しているのに驚きを禁じ得ず、次のように書いている。「狼に変えられ、再び自分自身に戻った人々の話は嘘だと我々は断言しなければならない。さもなければ、非常に多くの年月の経験が我々に作りごとに過ぎないと教えてくれたすべての話を信じなければならないことになる<sup>21</sup>。」それを人々が信じないことを恐れて、プリニウスがあえて断言しないのがよくわかる。というのも、彼はギリシア人作家の中で最も権威のある者のひとりであるエウァンテスを引用しているからである。彼は、アルカディアにアンタエウスという名の一族がおり、ある川を渡ると狼に変身し、再び川を渡ると人間の姿に戻ると述べている。ここからは、一族すべてを損なうには妖術師が一人いれば十分だということがわかる。

ここで注目しておきたいのは、ボダンがプリニウスの言葉を自分の都合がいいように解釈しているという点である。プリニウスが狼化は作りごとに過ぎないと断言しているのに、ボダンはこのような不思議な話を信じられない人々に迎合してこのように述べたのだとするのである。プリニウスはエウァンテスの伝えた狼化の話を一般に信じられている妄信の一例として伝えているのだが、ボダンは逆に狼化の存在を示す証拠としてこの話を用いたのである。さらに、妖術師が動物に変身した事例は無数にあり、オラウス・マグヌス、サクソ・グラマティクス、フィンセル、ブラバンのギョームらもそれについて書いているとボダンは言う。オウィディウスの伝える変身については、真実と物語が一緒くたにされているとしながらも、アルカディアの王リュカオンが狼に変身したことは疑いえないことだと断言する。理由は、当代においてもある王が動物に変身しており、これはあちこちでふつうに見られるからだとする<sup>22</sup>。

ホメロスが伝える、魔女キルケがオデュッセウスの仲間たちを豚に変身させたという話は単なる物語ではないとボダンは言う。というのも、奇妙に思われるとしながらも、アウグスティヌスが『神の国』において同じ話を伝えており、アルカディア人たちの話も引用している。そして彼の時代にもチーズを旅人に食べさせ彼らを動物に変

身させる者がいた。これらの例と、何よりも第一にネブカドネツアル王の変身を根拠に、狼化が現実には起こるとボダンが主張した。もちろん彼も、狼化は病気による妄想に過ぎないとする伝統的な医者たちの見解を知っていたが、彼らの説には根拠も証言も不十分だとする。現在に至るまで狼化現象について書いた者たちすべては、人間の姿は変化するが精神と理性はそのまま残っていることに同意しており、このことはホメロスのオデュッセイアでうまく言い表されていると述べ、ボダンはオデュッセウスの仲間たちについての次の一節を引用する。すなわち、「彼らは豚の体毛と頭と体をもったが、しっかりとした理性はそのままであった<sup>23</sup>」。

本質的な形相とは理性であり、変わるのは姿だけだとボダンは述べ、狼化は「司教法令」にも神がすべてを創造したということのみならず悪霊たちが形相を変える力をもたないとする神学者たちの考えにも反していないとボダンは主張したのである。

### 2.3. アンリ・ボゲ『妖術師論』(1603年)

サン・クロードの裁判官アンリ・ボゲ(1550頃—1619年)多くの人狼裁判に立ち会った経験をもつ。ボゲは『妖術師論』<sup>24</sup>(1602年)の第47章「人間の動物への変身について、そして特に狼化現象あるいは人狼について」でこの問題について詳述している。まず、ボゲは実際に人狼となり人間(多くは子供)を貪り食ったと自白した者たちについて記す。

サヴォワ出身のジャン・ボケはグロ・ジャックという名前でも知られているが、彼はフランソワーズ・スクルタンの告発で逮捕された。オルシエール出身のクロード・ジャンプロストはグロ・ジャックに告発された。クロード・ジャンギヨームとティエヴェンヌ・バジェは同じくオルシエール出身であり、グロ・ジャックとクロード・ジャンプロストに告発された。クロード・ガイヤールはエブシュー出身であるが、先立つ裁判からもたらされた情報により投獄された。

クロード・ガイヤール以外の4人は狼に変身し、その姿で何人かの子供を、つまり、ロンシャモワのアナトワル・コシェの子供、オルシエールの反徒として知られるティーヴァン・ボンディユの4、5歳の子供、名の知れたクロード・ゴダールの子供、アントワヌ・ジャンドルの息子クロードの子供を殺した。最終的に、彼らは1597年にロンシャモワ近郊で落ち合い、クロード・ボールの2人の子供であるイチゴをつんでいた男の子と女の子のうち女の子を殺し、男の子には逃げられたと自供した。彼らはまた、先述の子供たちの体を食べたが、決して右側には触れなかったと言った。これら

の殺人は両親たちの証言とロンシャモワとオルシエールの幾人かの村人たちの証言によって証明された。彼らはこれらすべての子供たちがしかじかのときにしかじかの場所で狼に捕らわれ食われたと証言したのだった。

クロード・ジャンギヨームは別のふたりの子供たちを殺すところだったと付け加えた。そのために彼女は山小屋の後ろに1時間ばかり隠れていたが犬に邪魔されたため、代わりにこの犬を殺した。それにもかかわらず、彼女は子供のうちのひとりの太ももにどうにか傷を負わせた。

また、ジャンヌ・ペランはクロード・ガイヤールが狼に変身し、その姿でフロワコンブと呼ばれる森の中で自分に襲いかかってきたとする証拠を出した。したがって、これらの妖術師すべてはすべて狼に変身したのであるから、一緒に裁かれることは好都合なのである<sup>25</sup>。

このように実際の人狼裁判について記した後で、ボゲは言う。「人間が動物に変身することが可能かどうかについてはおおいに議論されており、ある者たちが可能性を肯定する一方で、別の者たちはこれを否定している。そして双方の見解には十分な根拠がある<sup>26</sup>。」こう述べた後で、彼は以下のような変身の事例を列挙する。アルカディアのアンタエウスの家族は一年のある時期狼になっていたこと、パラシアのデマエネトウスは子供の臓物を食した後、変身した。ブルガリア人たちの首領だったシメオンの息子ボヤンは、ウェルギリウスの伝えるモエリスのように、望むときに狼に変身していた。オウィディウスの伝えるリュカオンもまた狼に変身した。ヨブ・フィンセルはパドゥアで人狼を見たと言う。ヘロドトスはスキュティアの住民が狼に変身していたものだったと伝えており、北方の民族のあいだでも同様だった。ローマ人たちがハンニバルのアルプス越えを阻もうとしたとき、一匹の狼が彼らの軍隊の中から現れ、すれ違う者をすべて引き裂き、傷ひとつ追わずに逃げうせたという。1042年にコンスタンティノーブルの人々は150匹を超える狼の出現に困惑し、1148年にはジュネーヴの農地で並の大きさではない狼が出現し、30人を超えるさまざまな年齢の男女に殺された。それゆえ誰がこれらの狼たちが人狼あることを疑いうるだろうとボゲは言う。

そして、捕えられた人狼について次のように記している。

さらに、1603年7月18日にドゥヴルとジュールの両地区で、嵐がこの地方の作物を実に奇妙に台無しにした後で、3匹の狼が目撃されている。これらの狼にはしっぽがなく、その上、彼らは牛と山羊の群れの中を一匹の子ヤギ以外のどれにも触れるこ

となく走り抜けた。この子ヤギは狼のうちの一匹に少し離れたところに連れ去られたが、何の危害も加えられることはなかった。このことから、これらが自然の狼ではなく嵐を起こすことを助け、引き起こされた被害を見に来た妖術師たちであることは明らかである<sup>27</sup>。

このように、狼化が現実には起きていることを裏づけるような記述をしたあとで、ボゲは次のように言う。「それにもかかわらず、狼化は幻であり、人間が動物に変身することは不可能だというのが常に私の意見であり続けた<sup>28</sup>。」なぜなら、動物に変身した人間が魂と理性を変身後も持ち続けるか、変身の瞬間にこれらを失うかのどちらかが必要とされるが、どちらも無理なことだからだとボゲは言う。前者に関しては、野蛮な獣の体が理性的な魂をもつことは不可能だからだと彼は言う。後者については、変身のときに理性をなくすなら、再び人間の姿に戻るとき人間はいかにしてそれを回復することができるだろうか。もし、これを悪魔の力によって可能だとするなら悪魔が奇跡を起こせると認めることになってしまうとして、人間から動物への変身はありえないと彼は結論している。

ここで注目しておきたいのは、人間の魂が動物の体に宿ることはないと言った際の、ボゲが以下のような言葉である。「さらに、『創世記』において神は御自分にかたどって人を創造されたと言われており、これは主に魂について言われたことなのである。それほどまでに美しく聖なる類似物が獣の体の中に住まうと主張するとしたら、たいそう愚かしいことではないか<sup>29</sup>。」ヴァイアーと同じように、狼のような野獣と神の似像として造られた人間とのあいだは隔絶されているとボゲは訴えているのである。そして、ボダンとは異なり、体は豚に変身しても理性は残っていたと述べたホメロスは間違っていると断じる。いっぽうで、変身の際に理性的魂が抜けるとしたら、人間の体に戻るときにどうやって回復することができようか。もしこれが可能なら悪魔に奇跡が起こせると認めることになってしまうとボゲは言う。

ボゲは、悪魔の作用によって、妖術師たちは自分が狼に変身したのだと信じこんでいるだけだと考えた。では、狼に変身し人間に危害を加えているのがサタンであり、妖術師はそれを自分が行ったと想像しているだけならば、すべてはサタンの責任になるのだろうか。ボゲはこの見解を否定する。なぜなら、妖術師たちが駆け回って実際に殺人行為を働いていることは多くの実際の裁判で証言されているからである。そのうえ、変身して人を食らうというような、おぞましい意図をもつこと自体それだけで罪に値するとボゲは言う。このような意図を者は、まず神と天国を棄てた者たちだけ

だとも彼は言い添えている。尊く美しい魂を悪魔に捧げて悪行にふける妖術師たちは、ボゲにとって憎悪の対象でしかなかったのである。

### 3. ジャン・グルニエの事件とランクル

ボルドー高等法院の裁判官であり、ラブール地方で多くの妖術裁判を行ったピエール・ド・ランクル（1553–1631年、）もボゲと同様に、変身は悪魔による幻覚だと考えていた。『墮天使と悪魔の変節の図』<sup>30</sup>の第4の書において、ランクルは当時よく知られるところとなっていた、ジャン・グルニエの事件の裁判記録に添えられたソルボンヌの神学者ジャン・フィルサク（1556–1638年）の見解をそのまま書き写している<sup>31</sup>。フィルサクは悪霊が人間をある動物へと、あるいはある動物を別の動物へと本質的に変形させることはできないとし、魔術師や魔女の変身は真正の、あるいは本質的なものではなく単なる幻であるとした。当然、この悪霊たちの作用は神の許しの下で起こる。悪霊たちの働きは実に巧妙である。例えば、悪霊たちは妖術師たちの体のまわりの空気を調整することにより、見ている私たちの感覚をだまし、狼や犬や猫などの動物をまるで現実のものであるかのように見せる。また、悪霊たちは妖術師たちの心に変化を与え、感覚を鈍らせることによって、自分たちが動物に変身したと思わせるのである。病気によってありもしないことを信じるのは患者だけだが、悪霊による幻覚では働きかけられた者だけではなく見ている者たちもこの幻に苦しめられるとされた。

変身と関わる「司教法令」の内容の解釈も、フィルサクは『鉄鎚』を踏襲し、あるものを他のものに本質的に変えることができるのは無からすべてを創造した神のみであり、「司教法令」が否定しているのはこちらだけであり、悪霊の力で起こる魔術的な変身のことではないとした。魂の出し入れが必要な動物への変身は神のみに可能であり、悪霊ができるのは人間を恍惚状態にすることである。この場合、魂は身体を離れることはないが、魂の感覚や働きが止められているため、まるで魂が抜けたかの状態のように映る。モーセが杖を蛇にかえたり、ロトの妻が塩の柱に変えられたりしたのは、神の御業によるものであり、悪霊の作用による変身の議論とは関わりのないものとされる。何の批評も変更も加えずに自らの書物に載せていることから、ランクルはフィルサクの説に同意していたと考えられる。

#### 3.1 ジャン・グルニエの事件について

ランクルが人狼をどのようなものとしてとらえていたかを述べる前に、まず、ジャン・グルニエの事件<sup>32</sup>の概要を記しておく。

1603年、ボルドーのサン・タントワヌの羊飼いである13歳か14歳の少年が狼となって駆け回り、子供たちを襲撃し、彼らのうちの幾人かを貪り食ったとして告発された。少年は「森の主人」と呼ばれていた悪魔からもらった狼の皮をまとい、油脂を塗りつけ狼になっていたという。この少年がジャン・グルニエであり、彼は身体的にも精神的にも未発達であり、父親からは愚鈍な馬鹿者扱いされていた。村人たちからの目撃情報や証言があり、グルニエも犯した罪を認めていたため、裁判官たちは有罪に確信をもった。ことのいきさつを尋ねられたグルニエは、父親に追い立てられて四旬節に豚の脂肪を焼いて食べたこと、また同時に父と隣人のピエール・グラン（デュ・ティレール）も共に狼となって走ったと告発した。グルニエは、森の中で黒人の姿をした悪魔と契約し、悪魔から太ももにしるしをつけられたとも語った。彼が示した場所は確かに無感覚であり出血もしなかった。下級裁判所の裁判官たちは自らの確信を強める一方だった。

しかし、グルニエが父親と対峙させられたとき、状況に変化が訪れた。グルニエはいくつかの供述を翻し、父親が犬の骨と子供の手を吐き出したことを否定した。また、父親は抗議し、息子に村中の娘たちと寝たと言わせることなどたやすいことだと主張し、息子の愚かさをあざ笑った。グルニエの証言は矛盾したものであり、父親たちと狼に変身して走ったと言ったかと思えば、人間の姿だったと言ってみたり、彼らは変身しておらず走ってもいないと言ったり、彼らは娘たちを犯すために探していたと言ってみたりであった。法廷代訴人によれば、父親の隣人たちは、彼ほど善良で善き生活を送り人付き合いもいい人を他に知らないと言ったという<sup>33</sup>。また、裁判所の役人たちが父親の家を訪れたときに、森の主人と呼ばれていた悪魔にもらったとグルニエが証言していた狼の皮と油脂を探したが見つからなかった。裁判官たちは、グルニエには絞首後の火刑がふさわしいとする一方で、父親とピエール・グランは尋問にかけられるべきだとしたが、後者ふたりが上訴した。

ふたりの医師がグルニエを診察した。この少年が悪しき黒胆汁<sup>34</sup>で満たされているものの、狼憑きではないという点では両者の意見は一致した。しかし、医師のうちのひとり、この少年が妖術によって悪魔の策略で実際に訴えられている罪を犯したとし、少年の体にある悪魔につけられたしるしとその証拠だと述べた。もうひとりの医師は、少年の供述は単なるお話<sup>35</sup>にすぎず、彼は間違っただけだと考えた。

フィルサクは高等法院での判決を実に簡潔に伝えている。グルニエは街の修道院での生涯幽閉を宣告され、父親たちは翌月により丁寧な調べを行うこととされて釈放された。グルニエの減刑の理由については、彼の年齢、精神的な未発達（7, 8歳の子供にも劣ると判断された）、自分の犯罪を悔いて涙を流していたためとされる<sup>36</sup>。物証がなかったのもグルニエに幸いした<sup>37</sup>。

ここまでが『変節』第4篇の第2、第3言説の伝えるところである。この後につづく第4言説は修道院送りになった後のグルニエに関するもので、ランクル独自のものである。ランクルは自分が裁判官をしていたときに悪魔憑きも人狼も見たことがなかったため、このような変身は信じがたいものだったと述べる。また、このテーマに関しては無数の異なった見解があるのも彼を困惑させるもとだった。そのようなランクルは自らの疑問を解決するために、さらには新しい事実を知るためにグルニエに会いに行った。

### 3.2. ランクルとグルニエの対面

1610年、ランクルは先の裁判を知る人々を伴い、幽閉先のフランシスコ会の修道院へと出向いた。当時グルニエは20歳か21歳になっていた。中背で年の割には小柄で落ちくぼんだ黒い眼は野性的であり、すっかり当惑した様子であった。彼の眼からは自分の不幸を恥じているのが感じられた。彼はぼうっとしており、敬虔な様子は見られず、単純なことも理解できていないようだった。彼は通常のものより幅の広い非常に長く輝く歯をもち、それらはいくぶん突き出ており、悪臭を放っており半分黒かった。動物や人間を襲っていたためであろう。彼の指の爪はまた非常に長く、根元から先まで真っ黒いもの何本かあった。悪魔が彼に切ることを禁じていた左手の親指の爪もそうであった。これらの黒くなった爪については、足の爪を使う以上に酷使したため、劣化し損傷したと考えられる。「これは明らかに彼が実際に人狼だったことを示している<sup>38</sup>。」そして、グルニエは自分がかつて人狼であり、森の主人の命令に従って森の中をその姿でさまよっていたとランクルに告白した。彼は他の人々に向かっても自分が人狼だったと自由に述べていた。修道院にやってきた当初、彼は四つ足歩行と四つ足の動物がするような跳躍力において卓越した能力を示していたという。彼は森の主人がくれた動物の皮をかつて持っていて納屋に隠していたと述べた。父親もまたこの動物の皮を使っていたとも述べた。彼は父親に会うことをまったく望んでおらず、父親が面会に来るたびに逃げていたという。グルニエは自分がこのような目にあっているのは父親のせいだと考え、父親をひどく嫌っていた<sup>39</sup>。

グルニエは、いまだに小さな子供の肉を食べたいと思っていると告白した。特に、小さな女の子の肉は美味だとも語った。もし禁止されていないなら食べたいかとランクルが尋ねると、彼は率直に肯定し、少年の肉より少女の肉のほうがよりやわらかくていいと答えた。修道士たちによると、修道院に来て間もないころ、まれにはあるが彼が調理中の臓物や魚の内臓をこっそり食べているのが目撃されていた。また、修道院に監禁された当初、森の主人が二度ほどやってきたとグルニエは語った。グルニエは恐れて何度も十字を切りそれを毎日し続けたところ、森の主人は二度と来なくなった。やってきたときに森の主人は、多くの富を約束するから自分の元に戻って来いといったが、グルニエは拒否した<sup>40</sup>。

グルニエを間近で観察し直に彼から話を聞いたランクルは、人狼の存在を確信した。プリニウスは人間が狼に変身した後にまた人間に戻るとするのは間違いだとしたが、今や私たちは人狼たちが存在することを疑ってはならないとランクルは言う。だが、ランクルはボダンらの主張するような、人間の肉体が動物に変化するにもかかわらず人間の精神と肉体は損なわれないうままだとする考え方は教会の見解に反している、すなわち、一つの種から別の種への本質的な変換は奇跡的作用であり、神と彼の善き天使たちと祝福された者たちにのみ可能であると述べる<sup>41</sup>。

当然のことながら、ランクルも狼憑きと呼ばれる精神病があることを知っている。狼憑きの患者たちは魔術師でも妖術師でもなく、メランコリーに苦しんでいるだけだとランクルは言う。狼憑きたちは自分たちが狼に変身したとすっかり思いこんでいるだけで、他人にはそのような姿に見えない。だがその強い思いこみから、子供を食べたい、家畜を噛み殺したいというような願望をもつようになってしまう。彼らには裁判官よりも医者の方が必要であるとランクルも認めている。

だが、他者の目に映る変身は、単なる病気ではなく悪魔の作用によるものだとランクルは言う。では、それはどのようにして起きるのか。ランクルによれば3つの方法がある。まず、悪魔はある体を他の体の代わりに用いる。狼になって走ったと見せかけた者が寝ている、あるいはその場にいないときに、悪魔は自分が狼の姿になるか空気を集めて作った狼の形を利用してあらゆることをする。すると、その場にいない者がこれをしたと他の者たちは信じる。次の方法は、悪魔自らが狼や他の動物の皮である者を包みこむ。こうすることで、皮だけではなく本物の動物に見える。もうひとつの方法は、明示の契約あるいは協定によるものである。空気でできた狼あるいは他の動物の形や見せかけで彼らの体を覆うと、これらのものは体全体にぴったりする。これは人狼が何らかの軟膏を塗ったときに起こる。そのとき、地面を歩けば本物の狼



や狼の皮をかぶったかのように足跡がつくのだからという。

ランクルはジャン・グルニエをじかに観察し、彼から話を聞いたことにより、狼の存在を確信したのだった。バスク地方で多くの妖術師たちを裁いた経験をもつ彼にとっては、悪魔の巧妙なトリックはなじみのあるものでもあっただろう。既存の悪魔学者たちの書物から学びながらも自らの好奇心と探求心から人狼事件を調べ、被告から聞き取りを行った上でランクルは自らの論考を練り上げたのだった。

## おわりに

人狼および人間の動物への変身に関する記述は古典古代の文献にまでさかのぼることができるものである。中世の聖職者たちは、変身は悪魔によるまやかしにすぎず実際には起こらないとする見解を示していた。やがて近世の魔女狩りの時代になると、悪魔と結託した妖術師たちが妖術を用いて狼に変身し、家畜や人々を襲っているとする考え方が広まり、実際に人狼として裁かれる者たちが増加した。とはいえ、そのようなさなかにあっても、皆が人狼の存在を確信していたわけではない。まず、古来より狼化が精神病の一種だとする医学的見解があった。もしヴァイアーの言うように狼化が精神の病気ならば、人狼に必要なのは罰ではなく治療ということになる。病気ではなく悪魔に原因を求めるならば、悪魔の力が変身にどの程度関わることを考える必要があった。その際に、古典古代以来の文献や現実起こった人狼裁判を用いて、悪魔学者たちは自らの主張を正当化しようとした。また、悪魔の力をどの程度まで認めるかは神学とかかわる微妙な問題であり、彼らは注意を払ってその許容範囲を考えてもいた。今回取り上げた悪魔学者たちの中で、悪魔にもっとも大きな力を認めていたのは間違いなくボダンである。ボダンは悪魔の力は自然を超えており、人間の理性のではかりしれないものだと考えていた。ヴァイアーが自然と理性で悪魔について考えようとしたのとは対照的である。

ボダンは変身が実際に起こり、変身後も人間の形相である理性は残ると考えていた。しかし、ヴァイアーやボゲからしてみれば、すべての被造物の中でもっとも美しく神の似像として造られた人間の魂が獣に宿るなどということはあってはならないことであつた。だが、進んで悪魔と結託して妖術師となるような悪しき人間は、神よりも野獣のほうに似るのではないだろうか。悪霊や妖術の問題を探求する中で、悪魔学者たちは妖術を使う者たちが古代から絶え間なく存在していたことを思い知り、そのような人間の悪しき性質や獣性に憎悪の念をもったことであろう。そして、自らはそのような者たちとは違い、神の似像としてふさわしい者でありたいとも願ったはずだ。

もっとも、このような獣性はどのような人間にも多少なりとも存在し、何らかのきっかけで暴走することがあると考えたほうがよいのかもしれない。しかも、その獣性が被る仮面の種類は様々だ。当時の農村の人々にとって、狼は人間社会の周縁をうろつき、しばしば村に襲い掛かってくる最も身近にある野性であった。それは人間の獣性と結びつけられるのにかっこうの存在であったのではないだろうか。ランクルがグルニエの瞳の中に見た野性は、己のもつそれでもあった。

---

<sup>1</sup> ジャン＝ポール・クレベール『動物シンボル辞典』竹内信夫・柳谷巖・西村哲一・瀬戸直彦/アラン・ロシェ訳、大修館書店、1989年、「おおかみ」pp. 66-71.

<sup>2</sup> Laurence Harf-Lancner, « La métamorphose illusoire : Des théories chrétiennes de la métamorphose aux images médiévales du lou-garou », *Annales ESC*, 1985, n° 1, p. 208.

<sup>3</sup> 『アウグスティヌス著作集第14巻』岡野昌雄訳、教文館、1980年、pp. 300-301.

<sup>4</sup> 同、p.301. <>は筆者による補い.

<sup>5</sup> Brian P. Levack (Ed.), *The Witchcraft Source Book*, 2004, pp. 34-35.

<sup>6</sup> 仏語版をテキストとした. Henry Institoris et Jacques Sprenger, *Le marteau des sorcières*, Amand Danet (éd., et trad. par), Grenoble, 1990, rééd. de l'édition de 1973 (*Malleus Maleficarum*, 1486). 英訳も参考にした. *The Malleus Maleficarum of Heinrich Kramer and James Sprenger*, Montague Summers (trans.), New York, 1971 (reprint of 1928 ed.).

<sup>7</sup> Henry Institoris et Jacques Sprenger, *op. cit.*, pp. 317-318.

<sup>8</sup> オーベルニュのギヨームとも呼ばれる、13世紀フランスの神学者でありパリ司教.

<sup>9</sup> Henry Institoris et Jacques Sprenger, *op. cit.*, p. 214.

<sup>10</sup> ニコル・ジャック＝シャカン「ニノーとボダン——悪魔学者たちにとって<変身>とは」ジャン・ド・ニノー著、富樫櫻子訳、池上俊一監修『悪魔憑きと魔女』、工作舎、1994年、pp. 90-91. 古代からルネサンスにいたる狼憑きを取り扱った医学的文献に関しては以下を参照. « La lycanthropie dans la prose doctrinale du XVI<sup>e</sup> siècle espagnol », *Bulletin hispanique*, t. 117, n° 2, 2015, pp. 557-561.

<sup>11</sup> ヴァイアーのテキストには以下の仏語版を用いた. Johann Weyer (Jean Wier), *Histoire, disputes et discours des illusions et impostures des diables, des magiciens infames, sorcières et empoisonneurs : Des ensorcelez et demoniaques et de la guérison d'iceux: item de la punition que meritent les magiciens, les magiciens, les empoisonneurs et les sorciers* (Le tout compris en six livres), 2 vols., New York, 1976 (réimpression de l'édition de 1579).

<sup>12</sup> ドミニコ会の修道士であり、14世紀初めごろ異端審問官としてフランスで活躍した。『鉄槌』の中でもしばしば引用される。

<sup>13</sup> Johann Weyer, *op.cit.*, vol.1, p. 597.

<sup>14</sup> *Id.*

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 598

<sup>16</sup> *Ibid.*, vol.2, pp. 270-271.

<sup>17</sup> Jean Bodin, *De la démonomanie des sorciers*, Paris, Jacques du Puys, 1580(réédition de 1587), Paris, Gutenberg Reprints,1979.

<sup>18</sup> *Ibid.*, p. 107L.

<sup>19</sup> *Ibid.*, p. 110L.

<sup>20</sup> ウェルギリウスの『牧歌』VIII, v.95-99が引用されている。ここでは魔法使いのモエリスが毒草を使って狼になり森に隠れたのを私は何度も見た、と歌われている。

<sup>21</sup> プリニウス『博物誌』第8巻第34節からの引用。

<sup>22</sup> Jean Bodin, *De la démonomanie des sorciers*, p. 111L.

<sup>23</sup> ホメロス『オデュッセイア』第10歌第239-240行を引用。ボダンが理性 (raison) と訳したのはヌース (nous) である。

---

<sup>24</sup> *Discours execrable des sorciers. Ensemble leurs procez faits depuis dex ans en cà, en divers endroits de la France. Avec une Instruction pour un Juge en fait de la sorcellerie*, Lyon, 1602. テキストには以下のサマーズ版を用いた. Henri Boguet, *An Examen of Witches*, translated by E. Allen Ashwin, edited by Montague Summers, London, John Rodker, 1929.

<sup>25</sup> Henri Boguet, pp. 136-138.

<sup>26</sup> *Ibid.*, p. 138.

<sup>27</sup> *Ibid.*, p. 139.

<sup>28</sup> *Ibid.*, 143.

<sup>29</sup> *Ibid.*, 144.

<sup>30</sup> Pierre de Lancre, *Tableau de l'inconstance des mauvais anges et demons où il est amplement traité des sorciers et de la sorciellerie*, introduction critique et notes de Nicole Jaques-Chaquin, Paris, Aubier, coll. «Palimpseste», 1982. 仏語版と英語版双方を参照したが、ページ数の指示は以下の英語版による. *On the Inconstancy of Witches, Pierre de Lancre's Tableau de l'inconstance des mauvais anges et demons*, (1612), translated by Harriet Stone and Gerhild Scholz Williams, Arizona, Medieval and Renaissance Textes and Studies, vol. 307, 2006.

<sup>31</sup> フランスの伝統では、法廷が大学の専門家に助言を求めることはなかった。フィルサクはこのときのボルドー高等法院の裁判官たちのためではなく、未来の裁判に影響を与えようとして自発的に自らの見解を書き残したと考えられる。Jan Machielsen, « The Making of a Teen Wolf: Pierre de Lancre's Confrontation with Jean Grenier (1603-10) », *Folklore* 130, 2019, p. 240.

<sup>32</sup> 資料として用いた裁判記録は、マンドルーの著書所収のものである。Bibliothèque National. Manuscrits, fonds français, 13 346, folio 280 et ss. Robert Mandrou, « *Possession et sorcellerie au XVII<sup>e</sup> siècle* », 1997, pp. 42-109.

また、この事件に関して法学的な見地から以下の論文が書かれている。Xavier Perrot, « La malebeste, le juge et le Démon. Le procès du lycanthrope Jean Grenier en 1603 », *Revue Semestrielle de Droit Animalier*, 2014, 1, pp. 367-380.

<sup>33</sup> Pierre Mandrou, *op. cit.*, p. 47.

<sup>34</sup> ガレノス以来体系化された気質の4タイプのうちのひとつが黒胆汁気質である。陰気、軽率、臆病、強欲といった邪悪な性質をもつ。

<sup>35</sup> 民衆特有の社会慣行である夜の集い *la veillée* では、いくつかの家族が集まり、物語や雑談に興じた。幽霊や魔法使い、狼男などが話題となることもあったという。ロベール・マンドルー『民衆本の世界』二宮宏之・長谷川輝夫訳、人文書院、1988, pp. 25-28.

<sup>36</sup> Robert Mandrou, *op. cit.*, p. 105.

<sup>37</sup> 高等法院は悪魔とのかかわりより、事実に基づいて判断を下したと考えられる。Xavier Perrot, *op. cit.*, p. 378.

<sup>38</sup> Pierre de Lancre, *op. cit.*, p. 330.

<sup>39</sup> ジャンの母親は早くに亡くなり父親は再婚したが、二番目の母親も彼らのもとを去っていた。少年は父親から暴力を受けたことも告白しており、父に怒りを表している。しかし、「狼になつてともに走った」という供述などからは、父親への思慕の念も感じられる。

この点に関しては、マシルセンが詳しく書いている。Jan Machielsen, *op. cit.*, p. 247.

<sup>40</sup> Pierre de Lancre, *op. cit.*, p. 332.

<sup>41</sup> *Ibid.*, p. 335.